

「貧しさ」の真実：イエスと弟子たちをめぐる誤解を解く

イエスと弟子たちに対し、私たちは素朴で「貧しい」姿を思い描きます。しかし、その一般的なイメージは、聖書が伝える彼らの実像とは少し異なるかもしれません。

しかし、聖書の記述を詳しく読み解くと、彼らが現代の私たちが想像するような「日々の糧にも事欠く貧困者」であったわけではないことが分かります。彼らの「貧しさ」とは、経済的な困窮ではなく、より深い霊的な意味合いを持つものでした。

イエスの誕生と「貧しさ」の真実

イエス・キリストご自身の誕生もまた、「貧しさ」というイメージで語られますが、ここにも重要な背景があります。私たちが思い描くのは、寒々とした木造の馬小屋で、飼い葉桶に寝かされた赤ん坊の姿です。この情景は、どのようにして形作られたのでしょうか。

1. 聖書の記述：「飼い葉桶」と「宿屋の客間」

聖書（ルカによる福音書）には「馬小屋」という言葉は直接出てきません。記されているのは、「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったために」（ルカ 2:7）、マリアがイエスを「布にくるんで飼い葉桶に寝かせた」という事実です。

ここで「宿屋」と訳されるギリシャ語「カタリュマ」は、商業的な宿泊施設だけでなく、親戚の家の「客間」を指すこともあります。多くの学者は、ヨセフとマリアは親戚の家を頼ったものの、人口調査のために多くの人々がベツレヘムに集まっていたため、客間がすでに満員だったと考えています。その結果、人々が生活する母屋の一角（当時は家畜を夜間に入れることもあった）で出産し、赤ん坊のベッド代わりに飼い葉桶を使った、という状況が推測されます。

2. 初期の伝承：「洞窟」での誕生

聖書正典には含まれていませんが、2世紀後半に書かれた『ヤコブ原福音書』などの外典では、イエスは「洞窟」で生まれたと記されています。これは聖書の記述と必ずしも矛盾しません。当時のパレスチナ地方では、石灰岩の洞窟を住居の一部や家畜小屋として利用することが一般的でした。現在、ベツレヘムに建つ聖誕教会も、イエスが生まれたとされる洞窟の上に建てられています。

これらの記述が示すのは、極貧や孤独というより、王として生まれたはずの神の子が、華やかな宮殿ではなく、ごく普通の庶民の生活の喧騒の中で、極めて質素で謙虚な形でこの世に来られたという事実です。

3. イメージの定着：アッシジのフランチェスコ

この「謙虚な誕生」の情景を、視覚的に、そして感動的に人々の心に刻みつけたのが、13世紀の聖人アッシジのフランチェスコでした。清貧を愛した彼は、神の子が最も低い姿で来られたことを人々が肌で感じられるようにと願いました。

1223年のクリスマス、彼はイタリアのグレッッチョという村の洞窟で、本物の牛とロバを連れてきて飼い葉桶を置き、そこでミサを執り行いました。これが世界初の「降誕飾り（プレゼピオ）」と言われています。文字が読めない人々にとっても、この生き生きとした光景は、神の謙遜と愛を雄弁に物語るものでした。この習慣はヨーロッパ中に広まり、「馬小屋（あるいは洞窟）で動物たちと共に飼い葉桶に眠る幼子イエス」という、今日私たちが知るクリスマスの象徴的なイメージを決定づけたのです。

弟子たちは「自営業者」だった

それどころか、イエスに召された主要な弟子たちの多くは、当時の社会において、舟や網という生産手段を持つ経済的に自立した「事業主」でした。

- **生産手段の所有者:** ルカによる福音書によれば、ペトロは自分の舟を所有していました。舟や網は、当時の漁業において最も重要な資産であり生産手段です。彼らは日雇いの労働者ではなく、事業のオーナーでした。
- **共同経営と雇い人:** ペトロはヤコブやヨハネと共同で漁をしており（ルカ 5:10）、一種の共同経営者であったことが示唆されます。さらに、ヤコブとヨハネが召し出される場面では、彼らの父ゼベダイと共に「雇い人たち」が舟に乗っていました（マルコ 1:20）。これは、彼らの家族が複数の労働者を雇うほどの規模の漁業を営んでいたことを意味します。
- **重要な地域産業:** 当時のガリラヤ湖の漁業は、塩漬けや干物に加工され、ローマ帝国内に広く輸出されるほどの重要な産業でした。弟子たちは、利益を生み出す安定した経済活動に従事していたのです。

これらの点から、弟子たちは当時のガリラヤ社会において、安定した生活基盤を持つ「自営業者」あるいは中小企業の経営者家族であったと見るのが妥当です。

なぜ「貧しい」というイメージが生まれたのか

では、なぜイエスや弟子たちに「貧しい」というイメージが定着したのでしょうか。それには二つの大きな理由があります。

1. 社会的地位としての「庶民」

エルサレムの神殿に仕える祭司階級や律法学者、ローマと結びついた貴族階級といった支配層に比べれば、地方の漁師は明らかに「庶民」でした。彼らは専門的な神学教育を受けたエリートではなく、公的な権威も持たない一般人でした。使徒言行録で、ペトロたちが「無学な普通人」（4:13）と評されたのは、この意味においてです。この「庶民」という立場が、時代と共に「貧困」というイメージに結びついていきました。イエスご自身も、大工の子として、この「庶民」の側に立たれました。

2. 霊的な意味での「貧しさ」

これが最も重要な点です。キリスト教における「貧しさ」は、財産の有無以上に、**神の前にへりくだり、自分の力や富に頼らず、全面的に神に依存する**という霊的な姿勢を指します。

イエスが山上の説教で「心の貧しい人々は、幸いである」（マタイ 5:3）と語ったのは、この霊的な貧しさを指しています。

彼らが真に「貧しく」なったのは、イエスに出会ったその瞬間でした。安定した事業や家族という人間的な支えを自ら手放し、神という唯一の支えにすべてを委ねたからです。

「彼らはすぐに網を捨てて従った。」（マタイ 4:20）

「（彼らは）舟も父も残して、イエスに従って行った。」（マタイ 4:22）

彼らは、自らの資産や社会的地位に頼る生き方を捨て、すべてをイエスに委ねる道を選びました。この**自発的な選択こそが、彼らを霊的な意味で「貧しい者」にしたのです。**

結論

イエスの誕生の様子も、弟子たちの出自や決断も、キリスト教における「貧しさ」が単なる経済的な困窮を指すものではないことを示しています。

彼らが「貧しい者」の模範とされるのは、その社会的地位が「庶民」であったこと、そして何よりも、イエスご自身が最も謙虚な姿で来られ、弟子たちもまたその安定した生活をすべて投げ打ち、ただ神であるイエスのみに信頼を置くという、徹底した信仰の姿勢を示したからです。それは、私たちの人生の基盤をどこに置くべきかという、時代を超えた問いを投げかけています。